

# 旅は憂いもの

## —民俗学的な視点から—

神崎 宣武

### 1. 旅とはタベ

一般的にいえば、旅は、ハレ（非日常）の行動様式である。つまり、ケ（日常）から一時的に離脱すること。ある種の「おまつり」にほかならない。そこで、日頃の憂さを晴らす。それで、心身がリフレッシュする。いいかえれば、「癒し」の行動様式なのである。

しかし、それは、交通の発達や物資に恵まれた平和な時代背景があつてのこと、としなくてはならない。「旅は憂いもの、辛いもの」という諺が長く伝えられてきた。「観光」という言葉の普及も近代以降のこと、娯楽的な旅の歴史は浅い、といわざるをえないのである。

「旅」の有力な語源説に、「タベ」がある。

柳田國男が唱えた説である。タベは、「給われ」。まず、小正月の夜、子どもや青年たちが家々を巡り、戸口に箆や笠を置いて「タビタビ」とか「トビトビ」とかいて物乞いをするホイト（祝ぎ人）行事に注目する。そして、ホイトはタベトであり、旅人である、とみるのだ。

「旅人のタベという申込みに対して、農家はいつも弱々とその意に従うの他なかった」「古来の小正月の夜の笠取りも同じであつた」（『定本柳田國男集29』に所収の「旅と行商」）

とくに馱馬や人夫を使うことのない徒歩行では、たとえば食料も十分に携帯できない。そこで、往く先で食料や火種を乞い求めなくてはならず、門口に立ってはタベタベと唱える旅人がいた。のちに伝わる乞食とか勧進のはじめであり、古くは旅人の多くがそうだっただろう。

古く、旅は、難儀なことであつた。

たとえば、『万葉集』に旅の歌が多数載っているが、不便や不安をうたったものが少なくない。もちろん、一方に風景ののどかさや旅人同士の交際を明るくうたった歌もある。が、全体とすれば、万葉の時代の旅には、わびしく暗い風景の描写が目だつのである。

よそのみに君を相見て木綿だたみ手向の山を明日か越え去なむ

（巻 12-3151・岩波文庫版より、以下同じ）

若ければ道行き知らじ幣はせむ 黄泉の使い負いて通らせ（巻 5-905）

とくにこれは、歳をとってからの旅は、神仏に無事を祈願しても通じがたい難儀であることをうたっている。

旅とは、イエやムラを離れることであつた。俗世からの離脱、といいかえてもよい。それは、古代においては、死への「道行き」、と同義であつた。それゆえに、送別の宴は、無事を祈念する儀礼でもあつた。

### 2. 旅の安全を祈祷

草まくらゆく君を幸くあれと 齋瓦すゑつ吾が床のべに（巻 17-3927）

なお、ここでいう齋瓦は、呪術的な用具ではあるが、のちでいう陰膳かげぜんに相当する、とみることもできる。

わがひとり子の 草まくら 旅にし行けば 竹玉たかだまを 繁しじに貫ぬき垂たれ 齋戸いはひべに ゆふ取り垂しでて  
齋いはひつつ わが思あふ吾ご子 眞まさ幸さきくありこそ（巻 9-1790）

齋部とは、いわゆる祭祀土器。『古事記』では「忌瓮」、『日本書紀』では「嚴瓮」などと記されている。『万葉集』でも「齋瓮」の他に、「忌瓮」「伊波比倍」などの表記が認められる。ただ、齋瓦については、その形態や祀り方を特定することはできない。

甕・壺・瓶・杯など。古墳の発掘では須恵器の大量出土が認められるが、須恵器だけを想定するわけにもいかない。時代からみて、土師器も用いられた、とみるべきだろう。

特定できないのは、その呪法が後の世にほとんど伝わっていないからでもある。わずかに、延喜式の祝詞のなかに、「甕」がでてくるが、これを上代の呪法を継ぐものとみるか、単なる供えもの（酒）の表示とみるべきか、判断の分かれるところである。

「初穂ちかひをば千や願ほかい・八百願みかに奉り置きて、甕みかの閑高へ知り甕みかの腹満ならて双なべて、汁かいにも願かい  
にも称なへ辞ご意おへ奉まつらむ」（「祈年祭祝詞」、筆者読み下し）

旅人も、行く先々で神仏に道中の無事を祈願した。

それを「手向け」といった。狭義には、手向けは「峠のカミ」に対してであった。

いはばゆゆしみ 礪波山となみ 手向たむけの神かみに幣ぬさまつ奉り 吾あが乞ひ祈のまく はしけやし  
（巻 17-4008）

この手向けの習俗は、後の世にも伝わった。『嬉遊笑覧』（巻之七）にもいう。歩く旅は、それだけ艱難辛苦をともなっており祈願も切実であった、ということになる。

「山のたうげは手向けの転訓なり。手向けをたうげと訓ずるは、日向をひうがといへるが如し。たうげは上り下りの山のさかひにて、国も多くはこゝにさかへば、旅行の人、道のほとりをいのりて、国つ神に手向けする故の名也」

たとえば、旅の難儀といえば、野宿にあった。「夜露をしのげれば……」という言葉が伝わるように、野宿は、ただもの寂しいというだけでなく、ひどく体力を消耗させるものであった。野宿をすることで病気にも罹りやすく、一方で野盗の襲撃にもあいやすい。狐狸の出没や野犬の遠吠えさえも、もの恐ろしいことであった。

しかし、古代の旅では、野宿も余儀なくされたのである。

家いへがあれば筈はずに盛もる飯いを 草くさまくら旅りにしあれば椎しほの葉はに盛もる（巻 2-142）

奈良時代、一方ですでに駅制が敷かれていた史実がある。『古事記』『日本書紀』にも、駅・駅使・駅馬などそれを表わす言葉が登場する。本格的な駅制は、中国の交通制度を取りいれて大化の改新時に整備された。それによって、たとえば30里（のちの尺度でいうと5里）ごとに駅が配置された。駅には、旅舎や茶店も併設された。そして、駅馬も配され、伝馬の制度が開けた。しかし、それはあくまでも都を中心とした整備であり、官吏の公用の旅の便宜をはかるものだった。一般には、旅はなお難行であり、苦行であったのだ。和歌において「草枕」（草まくら）が旅の枕詞に使われるようになったのも、それがためであっただろう。

### 3. 中世まで続く旅の難儀

そうした旅の難儀は、時代を経てなお中世のあたりまで続いた。

むろん、時代とともに一方で往反の人びとが増えた。傀儡子・遊女・鶺鴒・鑄物師・木地師・葉売り・塩売り・女行商人などがかなり自由に旅をした形跡がある。つまり、旅商いが発達した。が、それをもって旅の隆盛というわけにはいきまい。いわゆる物見遊山の旅の発達は、その時代の文学や絵巻物からはしかと確かめることができないのである。

旅商いを除くと、むしろ旅は、特権者による特殊な行動様式であった。ひとつは、公務の旅であり、もうひとつは求道の旅である。

公務の旅で大規模なものは、皇族や将軍の巡察行や参詣行である。たとえば、その記録として治承4（1180）年の『高倉院厳島御幸記』（源通親）、建仁元（1201）年の『後鳥羽院熊野御幸記』（藤原定家）、康応元（1389）年の『鹿苑院殿厳島詣記』（今川了俊）、応永20（1413）年の『室町殿伊勢参宮』（作者不詳）などが伝わる。このうち、鹿苑院殿とは室町幕府三代将軍義満のこと、室町殿とは四代将軍義持のこと。参詣記のかたちをとってはいるが、南朝勢力を制圧するための軍事遠征であった。

そうした大がかりな公務の旅には、何人かの文官や歌人が随行している。それゆえに、紀行文や歌集が編じられたのである。南朝軍の京都突入によって一時美濃に避難した後光厳天皇に従って旅した二条良基は、『小島の口ずさみ』のなかで次のように記している。

おほかたこのただ御旅のなぐさめは たゞよるひる詩歌にてぞありし

単独や少人数で行かざるをえない旅は、なお寂しいものであった。『鹿苑院殿厳島詣記』（慶応元＝1389年）を記した今川了俊は、それより前に九州探題に任じられ山陽道を西下、赴任していくのであるが、その道々の心細さを次のように述べている。

「朝にまた山路なりぬ。これなむ岩国山なりけり。一つふたつある柴のいほりだになく、人はなれたる山中に、み山木のかけを行く。誠に岩たかく物心ぼそき路なり。夕べになりぬれど、きこりだにかへらず、鐘の声もきこえぬ所なり」（『道ゆきぶり』）

なお、そのあとに、「ふるき歌に、（中略）かたよせて詠めるなるべし」と付記してあるので、万葉の旅人たちの心情かくもあらん、と思い知ったということであろう。

#### 4. 「身を捨ててこそ」の求道行

難儀な旅は、修行の場でもあった。そこに身を投じる人たちの群れがあった。いわゆる隠遁者とか漂泊流浪の民たちである。

その代表的な人物が、西行法師であった。西行は、保延6（1140）年、23歳で出家する。そのとき、「惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは 身を捨ててこそ身をも助けめ」と詠んでいる。出家のいきさつはともかくとして、以後、西行は、漂泊の仏法修行者として旅に身をやつしたのである。『山家集』では、自らのその立場をうたっている。もっとも有名な歌が次の一首である。

ねがはくは花のしたにて春死なむ そのきさらぎの望月の頃

西行の出家のいきさつについては諸説あるが、いずれにしても厭世観が最大の理由であっただろう。そして、そこに仏教の「一所不在」の修法思想が大きく影響を及ぼしていることも、いうをまたない。

ちなみに、西行の旅は、京都の鞍馬寺をはじめに嵯峨、伊勢、白河から奥州路、高野山、西国路と半世紀に及ぶものであった。その間の耐乏生活が、結果として多くの厭世的な詠歌を生んだのだ。

西行の旅は、中世の歌人や僧侶に少なからず影響を及ぼしている。たとえば、後深草院二条は、『とはずがたり』のなかで「修業の志も、西行が修業のしき、うらやましくおぼえてこそ思い立ちしかば」と記している。

『とはずがたり』の二条は、後深草上皇の女房であった。当時の女房とは、上皇のおもいびと寵人のこと。正応元（1288）年のころだとすれば、31歳を迎えた年に出家。翌2年に鎌倉への東下りを試みるのである。

俗世を離脱し、一所不在の無常感にひたる。そうした旅を志向する風潮は、江戸の前期にまで伝わる。松尾芭蕉がそのよい例である。

芭蕉が『奥の細道』の巻頭にしたためた一文は、よく知られるところである。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり」

そして、以下のような一連の句を詠んでいる。

野ざらしを心に風のしむ身かな  
旅に病で夢は枯野をかけ廻る

芭蕉が旅に明け暮れたのは、17世紀後半のこと。そのころには、まだそのように詠むような道中の臨場感が残っていた、といわなくてはなるまい。むろん、主要街道は整備されており、そのかぎりではない。が、それを外れた地方の山坂道は、なお難儀な旅を強いるものであった。

芭蕉が最晩年に描いたとされる『旅路の画卷』には、そのようすが詳しい。たとえば、第二図に粗末な葛屋が描かれている。手前の男は、緑色の衣にくるまっており、奥の男は、黒の衣にくるまっている。奥の男が、たぶん芭蕉であろう。膝を立て、その上に笠を置いている。そして、頭巾をかぶっている。いかにも、寒さにふるえながら、それに耐えようとしている寝姿とみることができるといえるのだ。

寒けれど二人寝る夜ぞ頼もしき

まさに、そうした寒夜一宿のようすがうかがえるのである。

それは、芭蕉が、「古人も多く旅に死せるあり」というように、古代の旅と旅人のありように相通じるものであった。そして、芭蕉自身は、あえて古代回帰の旅に出た、ともいえる。

芭蕉もまた、西行の旅をならおうとしたひとりであった。

したがって、芭蕉の紀行文には、旅の難儀や無常が強調される傾向がみられるのも当然なのである。そのことは、同じように旅を題にして「夏河を越すうれしさよ手に草履」と詠んだ与謝蕪村や、「三度食ふ旅もつたいなしくれ雲」と詠んだ小林一茶などと比べると、きわだった特色といえるのである。しかし、蕪村は、芭蕉の死（元禄7＝1694年）後22年たって生まれており、一茶は69年後に生まれている。それは、とるに足らない年数のようだが、そうではない。元禄期の前、つまり17世紀に旅をした芭蕉と、それ以後の18世紀に旅をした蕪村・一茶とでは、旅をめぐる社会環境というものに違いがある、とみなくてはならないのだ。

## 5. 近世での旅が大衆化

江戸も元禄（17世紀末）を過ぎるころになると、旅の様相が大きくかわるのである。

その最大の理由は、江戸幕府における参勤交代の制度のもとで、街道と宿場の整備が成ったからで、前代に比べると旅が数段安全にできるようになった。そして、庶民もこぞって旅に出るようになったのである。

庶民の大勢は、半農半工・半農半商などの半農民であった。総じて、農民。彼らの「農間稼ぎ」がほとんど年貢の対象外であり、その副収入が旅に代表される消費文化を支えたことにもあらためて注目しなくてはならない。

もちろん、農閑期を利用し、寺社詣でを方便とした講中での団体行が主流であった。E・ケンペルの『江戸参府旅行日記』やジーボルトの『江戸参府紀行』から、日本は、当時世界でももっとも旅の盛んな国であったことがわかる。

そこで、道中記や紀行文学の発達をみる。復刻されたものだけみても、清河八郎『西遊草』、橘南谿『東遊記』、『西遊記』、松浦静山『甲子夜話』、野田泉光院『日本九峰修行日記』、菅江真澄『菅江真澄遊覧記』、古川古松軒『東遊雜記』、菱屋平七『筑紫紀行』、などがある。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』は、フィクション仕立てではあるが、弥次・北の旅のありようは、当時の庶民の旅を象徴している、といつてよい。

そして、諸国の「名所図会」や「道中案内」の類も数多く出版された。

いちいち紹介するまでもなく、そこでは飲食や買い物、芝居や座敷芸などを楽しむ旅のようすが生き生きと描かれている。ここにおいて、旅は難儀から快樂へと大転換をみたのである。もちろん、交通や宿泊の不便はあったが、旅の様相としては現代にも通じるものの萌芽がみとめられるのだ。

古代・中世においては、「旅は憂いもの、つらいもの」。近世においては、「旅は相みたがい、楽しむもの」と相なるのだ。とくに、江戸時代の中期（元禄から文化・文政期のころ）は、歴史上でも現代（高度成長期以降）と相対されるべき旅行隆盛期であった、といっても過言ではあるまい。

江戸中期と現代における旅の隆盛・大衆化をみるとき、その間の明治・大正・昭和前半（とくに高度成長期以前）にも注目しなくてはならない。この間に国内の鉄道、海外への航路の発達をみた。にもかかわらず、旅が江戸中期ほどに大衆化したとはいいがたい。新たに修学旅行の発生をみだし、紀

元 2600 年(昭和 15 年)の植民地への観光動員などはあったが、江戸の旅ほどの大衆性はもちえなかった。現代と比較してみても、そうである。

それは、ひとえに社会・経済の安定に関係する。明治以降の日本は、軍事国家の体制下にあった。日清・日露戦、二度の世界戦などもあり、総じて個人の自由がききにくい時代であった。「ぜいたくは敵だ」という標語は、そのなかでも非常時のものであったが、ぜいたくのひとつである観光旅行は、おしなべて発達しにくい情勢下にあった、といわざるをえない。

あたりまえの結論になるが、旅は、社会と経済の安定、それに交通の発達があって大衆化するものなのである。観光旅行は、平時時の行動様式なのである。

ただ、それが後世にも残る優れた詩歌や紀行文を生む土壌となるかどうかは、現代の旅の大衆化をみるかぎりには別問題であろう、ということも付記しておきたい。「旅は憂いもの」であればこそその時代により文学的な表現の重さがある、ともいえる。日本では、これまで『万葉集』に収録された「<sup>た</sup>羸<sup>り</sup>旅」の歌をはじめとする数多くの紀行文学を伝えてきた。私たちは、それらを読み比べながら旅の歴史がたどれることを、幸せなこととしなくてはならないだろう。

#### 《参考文献》

- 『新訓 万葉集』(上・下巻) 岩波書店(岩波文庫)、1955年(改版)  
大島延次郎『日本交通史概論』吉川弘文館、1964年  
『日本庶民生活史料集成 第2巻』(紀行) 三一書房、1969年  
『定本 柳田國男集 29』筑摩書房、1970年  
宮本常一編著『庶民の旅』社会思想社、1970年  
新城常三『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会、1971年  
山折哲雄編『遊行と漂泊』春秋社(大系仏教と日本人6)、1986年  
大星光史『漂泊俳人の系譜』世界思想社、1989年  
神崎宣武『江戸の旅文化』岩波書店(岩波文庫)、2004年